

港北公会堂綴帳

# 陽に萌える丘

から解き明かす港北の歴史

人間国宝・芹沢銈介が描いた知られざる港北の宝



芹沢銈介綴帳プロジェクト

港北公会堂の

緞帳(舞台の幕)

# 「陽に萌える丘」

一体何が描かれて

いると思いますか？



答えは鶴見川です

そしてこの原画を

描いたのは

人間国宝・芹沢銈介

せりざわ けいすけ

さあ

織り込まれた物語に

耳を傾けてみましょう

私たちの住むまちのことが

見えてきますよ

横浜市港北公会堂の緞帳「陽に萌える丘」に「**せ**」という作家のサイン（25ページ参照）を見つけた時、「芹沢作品がなぜここに？」という素朴な疑問が生まれ、この緞帳についてもっと知りたいと思うようになりました。

芹沢作品との最初の出会いは、生まれ育った京都でよく行った民芸資料館です。家族もその魅力に惹かれ、我が家にとって芹沢作品は身近な存在でした。そのためか、その後移り住んだまちで目にした緞帳に不思議な縁を感じたことを覚えています。

更に、ある美術館で見た図録にこの緞帳が掲載されていたことで、改めてその価値に気づき、多くの人々に伝えたいと思うようになりました。それが「芹沢 銈介緞帳プロジェクト」のはじまりです。コロナ禍により何度も延期になりましたが、二〇二二年十二月に、イベント



## 生まれ育った京都で出会った 「芹沢銈介」と港北区で再会！ そこに秘められたストーリーを みんなに伝えたい

芹沢銈介緞帳プロジェクト代表  
大野玲子

「芹沢銈介知られざる港北の宝く公会堂の緞帳をデザインした人間国宝」を開催し、緞帳の魅力を広く紹介することができました。

イベント終了後、次に私たちにできることは何か？と考えた結果、冊子づくりにとりかかることになりました。冊子では、緞帳に描かれた鶴見川を中心に、港北区の歴史や川と共にあった人々の暮らし、旧家についても言及しています。川を描いているにもかかわらず、なぜ作家は「陽に萌える丘」と名づけたのでしょうか。その想いを想像しながらページをめくっていただければ嬉しく思います。

緞帳について調べていくうちに、記憶や記録というものは時とともに風化していくものだ実感しました。この冊子が「記憶の継承」の一助になればと願っています。

---

# この冊子でふれる重要な図案

---

写真提供・日本民藝協会

## 実際の<sup>どんちょう</sup>緞帳に採用された原画

芹沢銈介作「陽に萌える丘」日吉の森庭園美術館蔵



## 「陽に萌える丘」のモチーフになったとされる江戸時代の絵図

「鶴見川流域絵図」池谷家蔵



# 陽に萌える丘の他に芹沢銈介が制作した原画3点

いずれも日吉の森庭園美術館蔵

「遺跡」



「土器」



「柳」



はじめに

港北公会堂とは？まずはここから話を始めよう

芹沢銈介とは？原画を描いた人間国宝について

9

7

# 1

## 原画のモチーフ 鶴見川

鶴見川と密接に関わってきた港北区の歩み  
「陽に萌える丘」の  
ルーツをたどる

平井誠二 公益財団法人

大倉精神文化研究所理事長

11

原画の元になった絵図と地域への思いを聞く

「鶴見川流域絵図」と

池谷家について

池谷道義

池谷家第十六代当主

17

川と共生するため行ってきた治水事業の歴史

鶴見川と飯田家

飯田助知

飯田家第十四代当主

19

人生を共にしてきた鶴見川への思いと、災害に備える流域活動

緞帳の中に故郷あり

岸由二

慶應義塾大学名誉教授

NPO法人鶴見川流域ネットワーク代表理事

21

# 3

## もっと知ろう 芹沢銈介

ジャンルにとらわれない多様な仕事と才能  
芹沢銈介の仕事

村上豊隆

日本民藝館学芸員

27

「陽に萌える丘」を含む三つの緞帳原画の仕事

芹沢銈介の緞帳作品

村上豊隆

日本民藝館学芸員

29

孫弟子として見てきた

芹沢銈介の凄さ

土屋直人

土屋染色工房主宰  
国画会工芸部会員

31

## 本冊子での言葉遣いについて

### 陽に萌える丘

港北公会堂緞帳の名称は、多くの作品集や美術館において「陽に萌ゆる丘」と記されています。しかし、緞帳制作の過程を探っていったところ、制作当初は「陽に萌える丘」であった名称が、時が経つ中でいつの間にか「萌ゆる」に変わっていたことがわかりました。本冊子においては、本来の名称であった「陽に萌える丘」を使用しています。

### 原画

緞帳は、作家が描いた作品を、色糸を使用し織物作品として仕上げたものです。その元作品は「下絵」「原画」「図案」などいくつかの呼び方があります。私たち「芹沢銈介緞帳プロジェクト」では、これまでのイベントや映像などにおいて「下絵」と呼んできましたが、本冊子制作においては、この作品への敬愛の気持ちを込め「原画」と記すこととしました。

# 2 芹沢と鶴見川を繋いだ人物

人間国宝に緞帳の原画を依頼した経緯とは？

## 原画依頼の舞台裏

田邊陵光

公益財団法人日吉の森文化財団  
日吉の森庭園美術館 学芸員

23

## 田邊家と

## 日吉の森庭園美術館

26

## おわりに

### 港北区民文化センター

### 「ミズキーホール」の緞帳

37

### 「陽に萌える丘」を

### さらに知るために

38

# 4 もっと知ろう 緞帳のこと

考古学の視点から見ると二つの原画

## 原画に描かれた

## 太古の港北

33

橋口豊

横浜市歴史博物館学芸員

## 織物作品としての緞帳

## 京都・川島織物セルコンの仕事

35

「陽に萌える丘」を手がけた繊維会社と新たな港北の宝

# 港北公会堂とは？・まずはここから話を始めよう

## 区民の集いの場としての公会堂

港北公会堂は、東急東横線の大倉山駅を降りて左手、お店が並ぶにぎやかなレモンロードを歩いて約七分、港北区役所に向かい合うかたちで建てられています。区役所とおそろいの赤いレンガの建物の中にある約六〇〇席のホール（正式には「講堂」といいます）では、港北区民によるさまざまなイベント・発表会・企業や団体による式典などが行われています。「公会堂」というのは元々、市民の集いなどを行うための施設です。港北公会堂はまさに、港北区民のための集会場として、幅広い分野の幅広い年齢層の方々に利用されています。

また、建物の二階には約五〇名と八〇名収容の会議室と、和室が一部屋あり、こちらも区民によるサークル活動や生涯学習の教室など幅広く利用されています。



港北区役所に面した港北公会堂の入口

## 完成当時、昭和五十三年の日本は

建設されたのは、一九七八（昭和五十三年）年。区役所が、菊名（現在の港北図書館）から移転するのに伴い、それまで庁舎内にあった公会堂が区役所の隣に別棟として建てられました。昭和五十三年というと、昭和三十年代からの高度経済成長とその後のオイルショックが一段落し、安定的な経済成長がはじまりつつあったころ。日本が家電・自動車・半導体などのテクノロジー産業で世界に躍進をはじめ、国際社会での存在感を拡大させていった時期でもあります。この年の五月には海外渡航の増加を見据え成田空港が開港しました。



完成当時の港北公会堂(手前)と港北区役所(奥)

写真提供：港北区役所



## 緞帳に描かれたのは港北区の未来？

その頃の港北区は人口が急増し、小学校が毎年のように新設されたほど。それまでの木々が生い茂る丘陵地帯の中に広い農地が広がる風景が、ビルや住宅、工場などが林立



約 600 席の講堂に設置された緞帳

### 横浜市港北公会堂

所在地：横浜市港北区大豆戸町 26-1

開館時間：9 時 ~ 22 時

休館日：毎月第 2 月曜日（該当日が祝日の場合は翌日火曜日）  
年末年始（12 月 29 日 ~ 1 月 3 日）

※施設設備点検等で臨時休館日を設定場合があります。

電話：045-540-2400



する都市型の風景へと大きく姿を変えていった時代でした。そんな時代に完成した港北公会堂の緞帳の絵柄には「陽に萌える丘」という名称がつけられています。鶴見川を描いた古い絵図をモチーフに描かれたものですが、川の流れは光輝き、周囲の大地は緑生い茂り花咲き乱れる美しい光景として描かれています。当時の日本そして港北区が秘めていた、明るい未来に向けて躍進を始めようとする萌芽がここに描かれているようにも見えます。

この冊子では、そんな緞帳が誕生した経緯と、それを探る中で見えてくる港北区の歴史・生活・文化などを語っていかうと思います。

# 芹沢銈介とは？ 原画を描いた人間国宝について

(以下 静岡市立芹沢銈介美術館ホームページより)

## 芹沢銈介について

芹沢銈介は、一八九五（明治二十八）年静岡市葵区本通に生まれました。

東京高等工業学校（現・東京工業大学）工業図案科卒業後、生涯の師である柳宗悦と、沖縄の染物・紅型（びんがた）に出会ったことを契機に型染を中心とした染色の道を歩み始めます。



色差しする芹沢銈介（1980年3月14日）

## 略歴

- 1895年 5月13日、静岡市に生まれる。
- 1916年 東京高等工業学校（現・東京工業大学）卒業。
- 1929年 国画会展に「紺地蔬菜文壁掛」（杓子菜文）を初出品、国画奨学賞受賞。
- 1939年 初の沖縄滞在。紅型の工房に通うとともに、沖縄の風物に深い感銘を受ける。
- 1956年 重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定される。
- 1967年 静岡市名誉市民となる。
- 1976年 文化功労者となる。フランス、パリの国立グラン・パレで大規模な個展「Serizawa」展が開催される。
- 1981年 静岡市立芹沢銈介美術館開館。
- 1984年 4月5日、逝去（享年88歳）。

芹沢には色彩と模様に対する天与の才能があり、従来の染色の枠組みにとらわれない、新鮮で創意あふれる作品を次々と制作しました。芹沢は非常に多作で、また染色にとどまらない幅広い仕事をしましたが、生涯を通じて明快かつ温和な作風を貫いており、多くの人々に愛好されました。その評価は国内にとどまらず、一九七六（昭和五十二年）にはフランス政府から招聘をうけてパリで大規模な個展を行い大成功をおさめました。同年に文化功労者となり、一九八四（昭和五十九）年四月、八十八歳で惜しまれつつ永眠しました。

## 芹沢銈介の作品について

芹沢銈介が作品の制作に用いた手法は型染（かたぞめ）です。型染は、古くから日本で行われてきた伝統的な染色技法で、渋紙を彫った型紙と、もち米を主原料とする防染糊を用いて布を染めます。

一九二九（昭和四）年に染色家としてデビューした芹沢は、最晩年まで半世紀以上にわたって型染を手がけ、一九五六（昭和三十一年）年には「型絵染」で重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定されました。

芹沢の模様には、文字、植物、人物、風景、幾何学模様など、実にさまざまなものがありますが、初期から晩年まで、明快で親しみやすい作風で一貫しています。その種類も、着物、帯、のれん、屏風、額絵、絵本など、多岐にわたります。

また染色にとどまらず、本の装幀、ガラス絵、板絵、赤絵（陶器の絵付け）、看板や照明のデザイン、美術館の設計（大原美術館工芸・東洋館）等、実に幅広い分野で活躍し、豊かな仕事を残しています。



飛の字(1961年頃)



丸紋いろは六曲屏風(1960年)



布文字春夏秋冬二曲屏風(1965年)

鶴見川と密接に関わってきた港北区の歩み

# 「陽に萌える丘」の ルーツをたどる

平井 誠二

公益財団法人  
大倉精神文化研究所理事長



ひらい せいじ  
歴史家の仕事として港北地域の  
歴史を調べ始めて二十五年余り、  
著書に「わがまち港北 全三冊」が  
ある。現在、新聞折り込み情報紙  
「大倉山S.M. から版」に  
「大好き！大倉山」を連載中。

## 鶴見川流域絵図から 「陽に萌える丘」へ

芹沢銈介は緞帳の原画を四枚描いていますが、その際に下田町の田邊泰孝氏から提供された資料を見て描いたと言われています。この話は、田邊泰孝氏の著書『陰徳積めば陽報あり』（自費出版、二〇一一年）に記されており、四枚の原画の内、緞帳に採用された「陽に萌える丘」は『港北百話』（港北区老人クラブ連合会・港北区役所、一九七六年）の口絵写真として掲載された「鶴見川流域絵図」を見て描いたことも記されています（24ページ参照）。

田邊泰孝氏は、四枚の原画を複製画にして限定二百部で出版もしています（一九七八年十一月十二日発行）。その解説を

書いた民俗学者金子量重氏は、「この下絵は、港北を育ててきた祖先の努力と稔り豊かな土壌の上に、健やかに伸びゆく、明日の姿を表現したものであります。太くたくましい川の流れば、燦然とふりそそぐ太陽の光に七色に輝き、それを囲む丘には、美しい花が咲きみだれて」いると説明しています。

## 3種の絵を比較しよう

芹沢銈介の工夫は色彩だけではありませんでした。じっくり比較すると、実は描かれている範囲が微妙に違うことも分かります。まずは、「鶴見川流域絵図」と『港北百話』の口絵写真、そして「陽に萌える丘」の三種の絵を比較して、その上で「港

北を育ててきた祖先の努力」について考えて見ましょう。

鶴見川流域絵図（写真1）は、現在の緑区辺りから鶴見区の河口までを描いています。左端に付け紙があり、一八〇三享和三年に描かれたことが分かります。『港北百話』の口絵写真は、流域絵図の左側が省略されています（写真1の黄色い線の内側が口絵の範囲）。芹沢銈介の「陽に萌える丘」（写真2）は、口絵写真の左側をさらに省略し、縦横の比率を変え、川を一本省略しています（写真1の赤い線の内側）。このように、三枚の絵は全て微妙に違っているのです。

「陽に萌える丘」を細かく見ていくと、流水紋や青海波など伝統的な紋様で川を描いた部分（写真3）と、草花や樹木な

# 1 原画のモチーフ 鶴見川

写真1 「鶴見川流域絵図」赤・黄の線は筆者が説明のために描いたもの



写真2 「陽に萌える丘」



写真4 草木や樹木など丘を描いた部分



写真3 川の流れを描いた部分

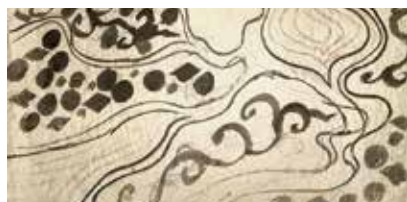


写真5 芹沢銈介が描いた「陽に萌える丘」のラフスケッチ

写真1の「鶴見川流域絵図」は、筆者が説明のために描いたもの。赤・黄の線は、筆者が説明のために描いたもの。原画には、古人の遺跡と関係がある丸や四角の模様が描かれています（33ページ参照）。ラフスケッチと完成した原画を比較すると、川には水の流れが加わり、丸や四角のデザインは草花等に変えられており、港北の大地をより自然に溢れた姿へと変貌させたことが分かります。

芹沢銈介は、鶴見川流域絵図を単に模写したのではなく、描く範囲を絞り、視点を変えて、港北の未来を象徴する芸術作品に昇華していると言えるでしょう。

ど丘を描いた部分（写真4）とに分けられます。芹沢銈介は河川と大地を明確に描き分けています。実は、四枚の原画にはそれぞれに墨描きのラフスケッチが存在しています。日吉の森庭園美術館が所蔵する「陽に萌える丘」のラフスケッチ（写真5）を見ると、川は2

## 港北区と『港北百話』

では、田邊泰孝氏はなぜ『港北百話』を芹沢に見せたのでしょうか。

横浜市港北区は、神奈川県橋樹郡・都筑郡の一部地域と横浜市神奈川区の一部とを合わせることにより、一九三九（昭和十四）年に成立しました。この時の港北区は、現在の緑区・青葉区・都筑区を含む広大な地域でした。この広大な旧港北区は、そのほぼ全てが鶴見川流域の中に位置していました（写真6）。流域とは、降った雨が集まる範囲のことです。鶴見川流域とは、降った雨が最終的に鶴見川へと集まる範囲のことで、二三五平方キロメートルの面積があります。旧港北区の面積は一二二・四平方キロメートルでしたから、鶴見川流域の二分の一以上の面積を占めていました。港北区域の歴史は、鶴見川流域の歴史でもあったのです。

広大な港北区は、その後一九六九（昭和四十四）年に二つに分区し、一九九二（平成四）年の行政区再編成を経て現在の港北区が生まれました（写真7）。

港北公会堂の完成は一九七八（昭和五



写真6 成立当初の港北区と現在の区域  
(NPO 法人鶴見川流域ネットワーク提供のマップに加筆)



写真7 区域の移り変わり

十三）年ですから、緞帳が作られた昭和五十年代は今と区域が違っていたことを私たちは意識しておく必要があります。その当時まだ開発中だった港北ニュータウンは、今では都筑区になっていますが、当時は港北区に含まれていました。ニュータウン開発に際しては詳細な発掘調査が全域で実施されて、数多くの遺跡が見つかりました。当時の港北区民にとって、緞帳の原画に土器や遺跡を描いた絵があ

るのは当たり前だったのでしょう。余談ですが、新総合庁舎落成祝賀事業の一環として昭和五十四年に「港北の歌」を募集して「港北音頭」と「港北の空と丘」が選ばれ、レコードが作られました。そのレコードジャケットは、「陽に萌える丘」の絵が使われ、題字も芹沢銈介の手によるものでした（写真8）。「港北の空と丘」は、第一番で「太古の姿そのままに遺蹟の丘で眼にふれる土器のかげらのいと



写真8 「港北音頭」と「港北の空と丘」のジャケット  
左は、そのジャケットのために芹沢銈介が描いた題字



写真9 古老の話をまとめた本『港北百話』

しさ」（鳥羽和一作詩、石本美由起補作詩）と歌っていることから、太古の遺跡が区民の誇りとなっていたことが窺われます。この三年前、港北区役所と港北区老人クラブ連合会が協力して、各地域の古老から昔の話を聞き、それをまとめた本を作り『港北百話』と題して刊行していました（写真9）。太古の昔から、流域の住民は鶴見川流域の丘の上に住み、鶴見川から恩恵と被害を受けながら、川と共に生活してきました。ですから、この本には鶴見川に関連した昔話が数多く採録されています。鶴見川との歴史を雄弁に物語る流域絵図が『港北百話』の口絵写真に使われたのはそのためでしょう。この本に港北区民の悠久の歴史が刻まれていることが、田邊泰孝氏が芹沢銈介に見せた理由と思われる。

## 鶴見川流域絵図とは

次に、デザインの始まりとなった鶴見川流域絵図について整理しておきましょう。

鶴見川は、東京都町田市上山小山田にある源流から横浜市鶴見区の河口まで長さ四十二・五キロメートルの川です。この内、矢本川と恩田川が合流する緑区佐江戸辺りから下流の地域では、大雨が降ると度々洪水が発生しました。洪水になっても人が住んでいなければ問題ありませんが、洪水により住民が被害を受けるとそれを水害と言います。かつての鶴見川は度々大きな水害を引き起こしたことから、暴れ川とも呼ばれていました。

鶴見川流域絵図は、度重なる水害に苦しんでいた鶴見川の中・下流域の三十三カ村が団結して、一八〇三（享和三）年に江戸幕府へ河川改修の工事を陳情した時に、陳情書類の付図として作成されたと考えられています。この絵図を所蔵しているのは、南綱島村（現・綱島東）の名主をしていた池谷家です。池谷家は、三十三カ村の総代も兼ねていたことから、提出書類の控えを作成したのです。池谷家は、それを今でも大切に保存しています。

写真10 芹沢銈介が描いた4枚の原画



## なぜ「陽に萌える丘」が 選ばれたのか

一九七八（昭和五十三）年、現在の港北区役所総合庁舎と港北公会堂がオープンしました。総合庁舎建設に関する資料は沢山残されていますが、公会堂に関する資料はほんの僅かしか残されていません。しかも、緞帳のデザインを芹沢銈介に依頼した経緯は、陰徳を旨とした田邊泰孝氏の意向により長い間伏せられてい

たために、「陽に萌える丘」がなぜ緞帳のデザインに採用されたのか、今となっては確かなことは分かりません。

推測になりますが、以下に筆者の考えをお示ししましょう。

依頼を受けた芹沢銈介は、原画を四枚描きました（写真10）。四枚がすべて並列の扱いだったのか、最初から「陽に萌える丘」が第一候補だったのかも分かりません。「陽に萌える丘」を、誰がどのような理由で選んだのかも伝えられていません。当時

の統橋一男港北区長や田邊泰孝氏等、緞帳制作に係わった人達が四枚の中から選んだのだろうと、筆者は推測しています。

公会堂とは、人々が公益的な大きな集会行事を行うための施設です。港北公会堂を造る時の関係者は、これから港北市民がここに集い港北区の明るい未来を築いていく、そういう場所にしたいと考え、その想いを象徴したデザインの緞帳を求めたのではないのでしょうか。四枚の原画の中で、全ての住民の過去から現在、そして未来へとつながっているテーマの絵は「陽に萌える丘」一枚だけのように思われます。他の三枚の原画には、遺跡や土器、柳などが描かれていますが、当時の人達や今の私たちの心を揺さぶるような強い想いや物語性とか、未来へのメッセージは含まれていないように思われます。いかがでしょうか。

して未来へとつながっているテーマの絵は「陽に萌える丘」一枚だけのように思われます。他の三枚の原画には、遺跡や土器、柳などが描かれていますが、当時の人達や今の私たちの心を揺さぶるような強い想いや物語性とか、未来へのメッセージは含まれていないように思われます。いかがでしょうか。





写真11 1976年の水害。右側の鶴見川から堤防を越えて水があふれている

## 水害と共に歩んできた港北区

水害が多かった鶴見川流域では、上流側の住民と下流側の住民の対立や、右岸の住民と左岸の住民の対立がありました。しかし、水害対策は個々の村では対応しきれません。幕府の力に頼るしか術がありませんでしたが、幕府へ陳情して河川改修を実現するには、流域三十三カ村全での住民の結束が必要でした。一八〇三(享和三)年の幕府への陳情は、その結果の成果でした。しかし、当時の技術力で

は幕府でも事態を解決できず、鶴見川中下流域では明治以降昭和まで大きな水害が何度も繰り返されます。

戦後になると、鶴見川流域の人口が急増し市街地化が進み、農地や山林が住宅地や工場などに変わります。それに伴って土地の保水力が低下し、被害がより甚大になりました。一九六六(昭和四十二年)と一九七六(昭和五十二年)の水害(写真11)では、自衛隊の災害派遣も経験しています。

このように、港北区区域には鶴見川水害の長い歴史があり、鶴見川流域絵図はその中で作成されていたのです。

今現在、港北区域における最後の水害は、一九七六年の事です。港北公会堂はその二年後にオープンしました。鶴見川の総合治水対策が始まるのはさらに二年後の一九八〇(昭和五十五年)年です。当時は、まだいつ水害が発生するか分からない現実的な脅威を抱えていました。

その中で、流域に住む人々の想いと深い絆により作られた鶴見川流域絵図をモチーフにした絵が強いインパクトを持っていたのは想像に難くありません。一九七八年に、当時の人達が四枚の原画の中から

「陽に萌える丘」を選んだ背景には、こうした事情があったものと考えられます。

「陽に萌える丘」は、水害のない港北区の明るい未来と、強い絆に結ばれた港北区民を象徴しているのではないのでしょうか。

その後、河川改修が進み、雨水調整池や多目的遊水地なども造られて、鶴見川の安全性は飛躍的に高まりましたが、今も水害の脅威が無くなったわけではありません(写真12)。港北区民文化センターの緞帳(37ページ参照)が、「陽に萌える丘」のイメージとしてデザインされていることは、未来への大切なメッセージだと思います。



写真12 2014年の台風時 増加した鶴見川の水を一時的に溜め置く多目的遊水地

原画の元になった絵図と地域への思いを聞く

# 「鶴見川流域絵図」と 池谷家について

池谷家第十六代当主  
池谷 道義

池谷（いけのや）家は代々、南綱島村の名主として地域を治めてきただけでなく、洪水に悩む鶴見川流域の村々を束ねる「総代」の役割も担っていた家系です。その当時から伝わるお話を、池谷家現当主（十六代目）池谷道義氏に伺いました。

## 「鶴見川流域絵図」が 描かれた時代のこと

当時は、鉄道も自動車もなかった時代ですから、主な物流の手段は舟でした。そのため、村を治める立場の役人や名主は、物流を統括する意味で流域図を持っていたものと思われます。そしてそうした絵図が、かつてから頻繁に起きていた洪水被害軽減のための措置を幕府に請願す

るための資料としても使われたわけです。

当時、河川改修を請願し、その要求が通って改修をするとなっても、実際に工事を担うのは村人自身でした。しかし村人は基本農民ですから、改修をやる期間が農作業ができなくなるわけです。そのため、工事期間の年貢の収めを減免してもらうことなどが請願の主な内容だったと思われま

す。舟による輸送は、江戸時代には幕府へ納める年貢米が主でした。その後、明治になり横浜が開港し、人口が増え、東京・横浜という都市が栄えた以降は、そうした大消費地への農産物・レンガ・綱島の天然水など地域産品の運び出しです。逆に川を上る舟では、都市で出た屎尿を運び、農作物の肥料にするということも行われていました。

池谷家に保管されている「鶴見川流域絵図」



いけのや みちよし  
綱島に生まれ、今日まで綱島に生きる。池谷家十六代当主として、新綱島駅の隣地で築一六〇年の古民家と池谷桃園を継承しながら、綱島東の未来ビジョンを模索している。

## 池谷家と「鶴見川流域絵図」

池谷家の主屋は、今から約一六〇年前、江戸時代末期に建てられたものです。その時代、南網島村の名主を努めていた関係で、さまざまな古文書が保管されており、その数は約二〇〇点にも及びます。絵図も五〜六点残されていますが、綴帳に使われた「鶴見川流域絵図」は、その中で最も古いものです。

我が家の先祖は、先人たちの功績に誇りを持っている家でした。そしてその家屋が一六〇年間建て替えられることなく存続し続けてきたことが、こうした資料が数多く残っている最大の理由だと思えます。旧家から昔のものが失われていくのは建て替えのタイミングであることが多いと言われておりますからね。

家に所蔵されていた絵図が、公会堂の綴帳のモチーフになっていたことについて、実は私自身つい最近まで知らずにいました。この冊子を作られている「芹沢

銈介綴帳プロジェクト」の方から聞いて初めて知ったのです。

その事実を伺ってまず思ったのは、芹沢氏が我が家を訪れたのだろうか、ということとです。しかし、思い出してみても、父からそうした話を聞いたことはなく、恐らく現物を見たわけではないものと思われるます。それをとても残念に思いますね。



築一六〇年の池谷家の母屋(網島東)

相鉄・東急直通「新網島駅」は、実は池谷家のすぐ隣。新駅開業に伴う再開発で、この一帯は大きく変貌していくと思われまます。最後に変わりゆく地域への思いを聞きました。

## 池谷家のこれから

網島は、明治後期から昭和初期にかけては桃の一大生産地としての歴史があり、大正から昭和中期までは温泉街として大きく栄えました。しかし、どちらも時代の流れの必然ですっかり衰退しました。

一方、新駅ができ、近くには網島サステイナブル・スマートタウンが生まれ、今の網島駅周辺は、新しい街づくりが着々と進んでいます。

これからの池谷家は、規模の大きな地域開発の中に組み込まれることになりますが、残すべきものは継承し、単に継承するのではなくうまく活用できることは活用し、街づくりへの主体的な関わりを続けてゆきたいと考えています。

(芹沢銈介綴帳プロジェクト 阿部知行記)

川と共生するため行ってきた治水事業の歴史

# 鶴見川と飯田家

飯田家第十四代当主  
飯田 助知



いいだ すけとも  
江戸時代より北綱島村の名主として農地開墾や鶴見川改修に尽力してきた飯田家の第十四代当主。公立校の教職を経て神奈川県教育機関で要職を務めてきた傍ら、地域の諸活動に広くかかわってきた。

## はじめに

川と私たちの生活とのかかわりは、突き詰めていくと文明の発生にまでさかのぼる。私たちは、生存のために水を求め、食料の確保などのために雨を待望する。従って、本来川は親しむべき存在である。私たちが生まれ育ったふるさとの思い出も、山と並んで川がまず頭に浮かぶ。

本冊子の企画は、自然を題材に意欲的に凶案化を試みる人間国宝・芹沢銈介が描いた鶴見川をモチーフにした緞帳を取り上げている。生きる意欲と夢に立脚した芸術と自然とのかかわりに限らない興味を覚える。

## 飯田家について

飯田家は代々近隣地域の開拓開墾を進め、江戸時代は全期にわたって名主を務



飯田家の氷場で作られた氷は、鶴見川岸にある氷室(左奥の白い壁の建物)に貯蔵され船で横浜へ出荷された。

めている。特に横浜開港後は綱島寄場組合大総代として、近隣数十ヶ村を統括する名主役に任じられている。こうした行政の役割を担う一方、殖産興業を推進した。幕末から明治期にかけてであるが、開港場横浜のし尿処理を一手に引き受け肥料会社を設立して開墾地へ供給した。

## 治水事業へ

また、都会地の需要に応じ、製氷業を興し地元の天然氷生産農家を組織化したり、養蚕や製茶なども奨励した。こうした産業活動に伴う物資の輸送には鶴見川を多く利用していた。

明治期にはいると、飯田家当主(第十一代)は橘樹郡農会関係の数々の要職を務めながら、一八八八(明治二十一年)には大綱村初代村長を務めることになり、政治活動へのかかわりが次第に強くなっていった。その背景には、横浜の都市として活動が活発になり、周辺から郊外にまで都市化、人口増の波が押し寄せるとともに、京浜工業地帯の発展が著しく、ひとたび水害が起こると、その被害は途方もなく大きくなるということがあった。併せて、水害は原因も結果も水源から河川まで広域に及ぶところから、最終的に



明治43年の水害（鶴見歴史の会所蔵 吉川俊夫氏提供）

は国費による改修運動に進む必然性を持っていた。

そうした中で、一九〇六（明治三十九）年の被害は大きく、堤防の復旧に多大の費用を要した。さらに、一九一〇（明治四十三）年は鉄道の大動脈を含め未曾有の大水害をもたらした。流域住民は政府・神奈川県による河川改修を請願する運動を活発化させ、ついに一九二一（大正一〇）年鶴見川改修期成同盟会を発足させた。会長に飯田家第十一代当主が就任、以後、飯田家は三代にわたって会長（一九三三

年、同盟会が鶴見川水害予防組合に発展後は議長）を務めた。（二〇二一年、同盟会設立百年を迎え、鶴見川の治水事業の歴史と将来課題等をまとめた冊子「鶴見川水害予防組合史・増補復刻版」を出版した。左の写真はその表紙。）



## 自然とのかかわり方

圧倒的な自然の力の前に人間の無力さや限界を感じさせられることの多い水害や治水事業を前にして、なお、勇気をもって進まなければならない私たちにはどのような心構えが必要か。途方もなく困難な課題であり、多少抽象的になるが、歴史に学びながら思いつくままに列挙してみることにする。

まず、あきらめてはいけないということがあげられる。水害予防の歴史はそのことを執拗に語っている。常に科学的知

見を深めよともいえる。科学的ということに関連していえば、自然の包容力つまり癒し効果について肯定的な意識を持つことも必要であろう。

一方、関わる人間については、治水事業ほど人間の利害、好悪の感情が激しくあらわになるものは少ないように思われる。連帯意識と信頼感をどう高めていくか。川に関わってきた人の思いやりの深さと忍耐力には驚くことが多い。そうした精神が世代を超えて受け継がれていくことを願ってやまない。



綱島台にある現在の飯田家 長屋門

▶ 鳥山川合流・大曲直前の鶴見川。亀の甲橋から下流をみる。  
中央右の白い構造物は鶴見川目的遊水地の排水門



人生を共にしてきた鶴見川への思いと、災害に備える流域活動

## 緞帳の中に故郷あり

慶應義塾大学名誉教授 / NPO法人 鶴見川流域ネットワーク代表理事

岸 由二 きし ゆうじ

河川の防災対策に「流域思考」という概念を提唱し、鶴見川の総合治水に大きな貢献を果たした。

港北の宝、公会堂の大緞帳。モチーフとされた大蛇行する下流の流れと、周囲の丘陵と町。その全域が、幼少時の私の故郷に重なっています。  
川を上げれば、下流汐見橋のあたりのガラ場、芦穂橋の大蛇行、合流する矢上川と日吉の丘、綱島の丘と少年時代魚取りに没頭した早淵川合流地、転じて南にひろがるのは、獅子ヶ谷、樽町、二ツ池、三ツ池、総持

### 鶴見川と共に歩んできた人生



▲ 鶴見川の土手に立つ岸氏。ここ綱島周辺は岸氏が代表する『鶴見川流域ネットワーク』の地道な活動の成果で河川敷のビオトープが形成されるようになった。



- ▲ 末吉橋下手左岸。豪雨がくれば鶴見川だけでなく多摩川の氾濫水にも襲われる
- ◀ 鶴見川流域はバクの形。右の腰から脚が「緞帳」の領域

寺さんの谷。周辺の丘陵には花々の模様が配されていました。

父母の代から鶴見川下流の暮らし。終戦の混乱期に東京でうまれましたが、二歳から今日まで私もずっと鶴見川流域暮らしです。一九八五年、流域市民活動を企画して源流都市町田の最源流地に転居しましたが、四十三年つとめた先は慶應日吉キャンパス。流域を行き来する市民活動（鶴見川流域ネットワーク）の都合もあり、源流団地と綱島の町の往復生活。後期高齢になり、いま暮らしの大半を綱島の川辺の町ですごしています。

## 災害に備える総合治水の取組

一九九二年に創設されたその市民活動（T R ネット）は、東京都、神奈川県、町田市、川崎市、横浜市の行政区をこえ、雨の水をあつめる流域を単位として、防災、自然保護、地域文化づくりをテーマとする流域連携組織です。ことし設立三十一年。なお、国、自治体、地域、企業と連携する流域活動をつづけています。

最大のテーマは、豪雨災害にそなえる治水・防災の啓発、実践活動。行政の施設管

理や学校支援を通して啓発をすすめ、源流の森をはじめとする各地の緑を保全する活動もすすめています。事務所のある綱島では、国土交通省、港北区、綱島町内会とも連携して左岸一〇〇メートルの川辺の緑の再生、保全を推進中。

地球温暖化にともなう豪雨襲来が危惧されるいま。新横浜多目的遊水地が整備され総合治水四十年の成果を積んだ鶴見川流域でも新時代の取り組みが始まります。市街地率九〇パーセントに近づいた鶴見川流域は、流域の七〇パーセントを超える丘陵・台地に温暖化豪雨がふりそそげば、緞帳に描かれた大蛇行の領域で、ふたたび大氾濫の可能性ありと予想されているからです。

## 緞帳に込められた思いを未来へ

鶴見川は「つるむ」川。大蛇行する川の意と、私は理解しています。公会堂の緞帳は、大蛇行が作り出す低地と丘陵の入り組んだ下流域の美しい大地のうねりに、花咲く平穏の日々を希求した人々の希望です。源流に広がる壮大な保水の森とも連携しつつ、その緞帳世界の安寧をあらためて祈念し、工夫する日々が始まってゆきます。

人間国宝に緞帳の原画を依頼した経緯とは？

# 原画依頼の舞台裏

公益財団法人日吉の森文化財団  
日吉の森庭園美術館 学芸員  
田邊 陵光

私は港北公会堂の緞帳作成に尽力した田邊泰孝の孫にあたります。祖父は緞帳製作の過程で緞帳の原画四点を収集しました。祖父は二〇一三年に他界しましたが、生前に自身の自叙伝を記しました。その中で緞帳製作の過程が記されているので、この場をお借りして皆様に紹介したいと思います。



写真上 田邊泰孝氏  
写真下右 祖父・田邊泰孝氏の自叙伝を手に語る田邊陵光氏  
写真下左 芹沢夫妻とのスナップ

〔手前〕芹沢鈺介夫妻〔右後〕田邊泰孝氏  
〔左後〕彫刻家・田辺光彰氏（P.26 参照）



たなべ たかみつ  
港北区下田町で四〇〇年続  
く旧家・田邊家の第十四代。  
この地の原風景を残す活動  
に従事している。彫刻家・  
田辺光彰氏の長男。

## 田邊泰孝自叙伝 「陰徳積めば陽報あり」

「港北公会堂の緞帳は国宝級」より  
（一部修正の上抜粋）

緞帳と私（田邊泰孝）の関わりは次のことがきっかけでした。昭和五十三（一九七八）年当時に港北区助役の内山勝朗氏とのよもやま話の中で、「近々開館する港北公会堂のホールの緞帳が決まらなくて困っている」ことが話題にのぼりました。私は続橋一男区長に事情を聞いてみました。「カネばかり高くていい物がないよ。こんな漫画みたいなものとても付けられないし…。図柄さえも決まらなくて困っているよ」と、続橋区長。緞帳の請負業者が高島屋デパートに、八〇〇万円という発注価格を提示していました。高島屋では要望など条件が厳しいわりに安すぎて受けられない、と断つ



ていました。五〇〇万円という破格値で話を持って行ったところもあったそうです。川島織物にもこの値段で打診していましたが、もちろん断られていました。後から内山港北区助役らに聞いてわかったことですが、市が組んでいた予算額は一〇〇〇万円でした。

「それなら、芹沢銈介先生に伝手がある人を知っているの、引き受けてもらえるかわからないけど聞いてみるよ」ということで、金子量重さんに相談を持ちかけたのです。

「港北区長は芹沢先生に頼みたいと言っているけど、金子さん、あなた、芹沢先生のことをしばしば話すけど、頼めばやってもらえるのかな」と私が聞きました。

「さあ、どうだかな。いや、先生は今忙しくてやれないだろうね。でも、本気でやってほしいのなら、こんなものがないと思うアイデアを持って来なさいよ」と、金子さん。たたき台となる図案を考えとくるように宿題をもらいました。

そのアイデアをどこから捻り出すか。思いつく文献や資料を片端から調べました。その中で出会ったのが、『港北百話

(編・「古老を囲んで港北を語る」編集委員会、発行者・港北区老人クラブ連合会・港北区役所、昭和五十一(一九七六)年発行)でした。昔の鶴見川沿いの図面を見つけました。これなら公会堂にふさわしい、と思いました。これをお願いしてみよう……。

「キャッシュ払いの言い値にする」「織りは川島織物に委託する」という二つの条件が付きましました。今度は芹沢先生のご指名です、さすがに川島織物は断ることはできませんでした。四点の原画の中から、「陽に萌える丘」というタイトルがついた作品の採用が決まりました。この間も数回、ご自宅に伺いました。日程が少ないので東京支店で織ると思っていました。当時、川島織物の東京支店長は遠山景行さんでした。「遠山の金さん」こと、江戸町奉行遠山金四郎景元の子孫で、千代田区長遠山景光さんの弟です。ところが、東京支店で織っているのは落成式には間に合わせられない、といわれました。こうなれば、直接京都の工房に持ち込むしかありません。遠山東京支店長さんが直々に持ち込んでくれました。

緞帳の織下絵が完成すると連絡があり、続橋区長と金子さんと遠山さんと四人で川島織物の工房まで見に行きました。それはそれは荘厳、重厚なでき上がりでした。二〇〇色あまりの糸を使う想定でグラデーシオンをつけた見事なものです。床に広げられた緞帳の織下絵を前にして、四人とも声も出ませんでした。



織下絵を描く川島織物のスタッフ

芹沢先生に織下絵にサインをお願いしたら、「僕はそんなことはしたことがない」とお断りになりましたが、緞帳の上下左右が分かるためにも是非にと理屈をつけて重ねて頼み、

「せ」の字を書き込んでもらいました。緞帳もサイン入りです。

かくして、港北公会堂の緞帳は、

人間国宝・芹沢銈介先生のサインが入った大変貴重なもの、特注の一点ものになりました。早朝に京都を立ち落成式の五日前に公会堂に搬入。取り付けられるとホールは一挙に格調高い華やかさに包まれました。統橋区長も大満足でした。



「せ」のサイン

消防団長をしていたので、緞帳の話は小耳に挟む機会があり関心はありましたし、区長が困っていると聞いて素知らぬ振りもできませんでした。最初、外貨獲得旅行で大津さんと出会い、それが縁で金子さんと知遇を得、その伝手で民藝協会に入会し、そこで芹沢先生と面識が得られた……。すべてが見えない糸でつながっています。おカネの問題は行政の方で対応、



港北公会堂の落成式典  
1978（昭和53）年

処理したので、結局、いくらかかったのか知りません。原画代だけは、私が負担しました。依頼した手前もあつたし、キャッシュ払いが条件でした。妻ナヲ子は「父さんは仕方がないわね。おっちょこちよいで気が軽いから直ぐに乗せられてしまう。もう少し慎重にやってくれば良かったのに」と、半ば諦め顔でした。緞帳に関する一連の出来事に、私の名前はどこにも記されていません。他のことと同様、これも名誉欲でやったことではありませんでした。断られれば、それでおしまいだった話です。原画は自家の財産として、土蔵に納めてあります。こ

の緞帳は雑誌で「芹沢緞帳の最高の出来栄え」と取り上げられました。落成祝賀会には、芹沢先生ご夫妻も出席されました。

原画四点は現在、日吉の森庭園美術館所蔵となっており、「土器」を除く三点が観覧可能です（要予約）。また、同美術館には、原画に対応した墨描きのラフスケッチや、「陽」「萌」「丘」の文字に彩色が加えられた色紙六点（左写真）も所蔵されています。



## 田邊家と 日吉の森庭園美術館

田邊家は、下田町に江戸時代から続く旧家です。現在では財団を設立し周囲の環境を守る活動に従事すると同時に敷地を美術館として公開し、地域の人々に広く愛される場となっています。そんな田邊家と日吉の森庭園美術館についてご紹介します。



日吉の森庭園美術館

### 田邊家の始まりは江戸時代初期

田邊家は屋号を「長錠口」と称しています。その歴史は江戸時代に遡り、関ヶ原の戦いに勝った徳川家康は江戸幕府を開く際、当家初代大炊助に幕府直轄領（天領）三十石五人扶持と苗字帯刀を許し、現在の地（横浜市港北区）に定住させこの地の管理を任せました。

その後、田邊家は菩提寺である駒が橋山真福寺（現下田山真福寺）と氏神である熊野神社（現下田神社）の創建に尽力しました。周辺が急速に開発された現在でも数多くの樹木が残り、野生植物が育つ環境がいつまでも存続するようお願いを託し、財団を設立しました。

### 日吉の森庭園美術館

日吉の森庭園美術館は、所有する緑地や文化財を活かし、郷土に対する親しみや失われつつある風習・慣習などを海外の異文化と共に展示、研究、保存を行っています。民族の文化や自然への畏敬の念をもって、人間の本質的な豊かさや繋がりを考え、後世に伝えて行きたいと考えています。



MOMI-1994(2) 野生稲の発芽 1994年制作  
ステンレス 神奈川県立翠嵐高校所蔵

### 彫刻家・田辺光彰

国際的な彫刻家である田辺光彰（1939～2015年）は、田邊泰孝の娘婿です。30年に亘り“農”をテーマとし、とくに現代彫刻による野生稲（日本にはない稲の原種）自生地保全プロジェクトを制作のモチーフにすえ、作品はアジアの稲作地帯、国際的農業研究施設、各国の国立研究所、美術館、博物館、国連機関に収蔵展示されています。田辺光彰美術館では、作品展示およびその制作に大きな影響を与えた収集資料を常設展示しています。



遥かなるもの・横浜「貝」1985-87年制作  
ステンレスなど 横浜市本牧埠頭設置



田辺光彰美術館外観（日吉の森美術館内併設）

ジャンルにとらわれない多様な仕事と才能

# 芹沢銈介の仕事

日本民藝館 学芸員  
村上 豊隆

## 雑誌『工藝』の表紙装幀

民藝運動のリーダーで思想家の柳宗悦は、染色家・芹沢銈介と終生の師弟関係で結ばれ、互いを尊重しあっていたことが知られています。柳は芹沢について、彼の観察眼や謙虚さ、仕事への姿勢などとともに模様や色彩への才能を踏まえ、染物の領域で唯一の頼みになる作者であると評し、その人間性や仕事に高い信頼を置いていました。

芹沢の型染の初期の仕事に、雑誌『工藝』の表紙装幀があります。『工藝』は民藝運動を推進するための機関誌として一九三一（昭和六）年から一九五一（昭和二十六）年まで全一一〇号が発行され、柳も力を入れて編集に関わりました。この創刊号の制作が芹沢に託されましたが、柳を大いに感心させ期待に応える見事な仕事となりました。創刊号の表紙には布が用い



民藝創刊号表紙

られ、五〇〇から六〇〇部を染める量産の作業でしたが、芹沢の型染の仕事の土台を築く大きな仕事になったといえます。これ以降にも度々『工藝』の表紙装幀の制作に携わりました。また、沖繩の紅型と出合ったことも、型染の道に進む大きな理由となったといえます。



むらかみ とよたか  
日本民藝協会の機関誌『民藝』の編集・執筆などを主に担当し、二〇二〇年三月号「芹沢銈介の綴帳とステンドグラス」特集では、港北公会堂の綴帳「陽に明える丘」を紹介した。

## 「型絵染」で人間国宝に

こうして染色家として歩むことを決め、一九五六（昭和三十一年）年には重要無形文化財保持者「型絵染」に認定され、その評価は揺るぎないものとなりました。生涯に制作した型染作品は、動植物や人物、道具、文字、風景などさまざまな対象を題材にし、多くの優品が生み出されました。下絵、型彫り、型付け、色差しなど、それぞれが分業として成り立っていた型染の世界で、それぞれにおいて卓越した技術と才能を持ち得たことも、芹沢の位置を確固たるものとした所以であろうと思います。

## 作家としての遍歴

芹沢は、一八九五（明治二十八）年に静岡に生まれました。幼い頃より、画家



知恩院御影堂内陣荘厳布柱巻 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

になることを夢見て、水彩画などを描いていたそうです。家業が傾いたこともあって東京高等工業学校の図案科に進み、卒業後にデザイナーとして工業図案の仕事などを手がけていましたが、いつも傍にはスケッチブックを携え、気になるものを見つけては、写生をしていたといえます。型染の仕事を中心にするまではさまざまな創作活動を行い、ろうけつ染に力を注いだ時期があったことも知られています。対象を正確にとらえる能力はこのようなにして身につけられていきました。さまざまな作品を見てみると実物と違わ

ない構成力に圧倒されます。妥協を許さない性格も影響したかと思えますが、港北公会堂の緞帳にもその影響が垣間みえるところだろうと思います。そのなかでも一九七四（昭和四十九）年、浄土宗改宗八〇〇年の大法要のために制作された「知恩院御影堂内陣荘厳布」という芹沢作品があります。京都にある知恩院の開祖・法然上人の像が安置された御影堂（大殿）の内陣を飾るもので、芹沢の型染の仕事としては大作です。緞帳と比較する意味でもぜひ見ておきたい作品です。

## 染色以外の仕事

染色家として知られている芹沢ですが、その仕事は染色の分野だけに留まりません。型染の仕事の基本にはしていましたが、本の装幀からガラス絵、ステンドグラス、陶器への絵付けの仕事や、そのほかにも展示会の展示構成や自身で収集した数々のコレクションにおいてもその才を発揮し、多くの人々へ影響を与えています。このように、ジャンルにとらわれない多くの仕事は、芹沢の余技（専門外の仕事）としてとらえられることも少なくないのですが、彼はそれらの仕事全てに対して妥協を許さない仕事を続けました。

芹沢は画家になったとしても成功していたと言われていますが、型染の世界に身を置いたのは、柳の民藝の思想に共感したことが大きく作用しています。手仕事と職人を愛した一人の工芸家の歩みを今後も作品などを通して触れていただければ幸いです。

「陽に萌える丘」を含む三つの緞帳原画の仕事

# 芹沢銈介の緞帳作品

日本民藝館学芸員  
村上 豊隆

## 芹沢が手掛けた三つの緞帳

染色以外の芹沢銈介の多彩なジャンルの作品群のなかで、緞帳の仕事も特色ある仕事の一分野と言えらると思います。

一九六八（昭和四十三）年に倉敷の実業家、大原總一郎からの依頼で、大阪フェスティバルホールの緞帳「船渡御」図案が初めての緞帳の仕事となりました。芹沢七十三歳の時のものです。大原の死後完成したため、彼の評価を得ることは叶いませんでしたが、音楽好きの大原がその完成を心待ちにしていたことは病室に原画を飾っていたというエピソードからも伺えます。

その一〇年後、静岡市民文化会館中ホール「静岡市歌」港北公会堂「陽に萌える丘」の緞帳が続けて制作されました。この二つは一九七八（昭和五十三）年の仕事で、

芹沢八十三歳の時の作品です。大阪フェスティバルホールは、五色に染め分けた縦縞の上に金彩の合羽摺、静岡市民文化会館中ホールは静岡市歌の歌詞を型染にし多色の霞が筆で表現され、三つ目の港北公会堂は絵筆やクレヨンによる肉筆と、それぞれ異なる技法を用いて描かれています。フェスティバルホールはその後のリニューアル時に姿を消しているのので、現存しているのは静岡と港北公会堂の二カ所のみとなりました。

## 緞帳の仕事に対する思い

港北公会堂の仕事は八十八歳で生涯を閉じる芹沢銈介晩年の仕事と受け取られますが、精力的に取り組んでいきました。緞帳制作は当然ながら一人でできる仕事ではなく、さまざまな職人たちとの協働作業です。幼い頃から家を出入りし交流



港北公会堂緞帳原画「陽に萌える丘」日吉の森庭園美術館蔵

日本民藝館の村上豊隆氏には前のページにて、「芹沢銈介の仕事」について解説をいただきました。本稿では、芹沢氏の多様な仕事の中から、特に緞帳作品についてご説明いただきます。

のあった職人たちを見ていた芹沢にとって、自身が高齢となり衰えた力を補う意味も含めて、職人たちと一緒にできる緞帳の制作を何よりも楽しんでいたことでしょう。

緞帳の仕事は、原案を拡大して制作することから、拡大した際の影響まで考慮に入れなといけません。「陽に萌える丘」の原画からは、拡大した様子を想像して描いているような勢いがうかがえます。また独創的で自由な表現に見えますが、モチーフにした「鶴見川流域絵図」の



大阪フェスティバルホール「船渡御」下染 静岡市立芹沢銈介美術館蔵



静岡市民文化会館中ホール緞帳原画 静岡市立芹沢銈介美術館蔵

河川の流れる様子も当時の地図の配置を崩さず適切に描写し、そこに住む人たちの想いもきちんと考えていたであろうこと

も推察されます。こうして、港北公会堂の緞帳に込めた芹沢の思いは四季折々に咲く花や稲など稔り豊かな情景で満ち溢れた「陽に萌える丘」として描かれました。

### 私と港北区・大倉山

私が編集に携わっている月刊誌『民藝』二〇二〇年三月号で、この緞帳を取材し紹介するご縁に恵まれました。個人的な話で恐縮ですが、私の祖父母の家が港北区大倉根にありましたので、公会堂の最寄駅である大倉山には何度も訪れました。そして祖父母が亡くなった後は数年前まで私自身がその家に住んでおり、「陽に萌える丘」のことも以前から知っておりました。そうしたご縁もあり、私も非常に愛着のあるこの緞帳が、芹沢や関係者の思いとともに今後も末長く大切にされることを願っております。

## 模様への貪欲な姿勢

芹沢は作家として、模様に対して貪欲、あるいは、模様を作り出す元のデザインを見る眼がシャープだと思えます。周辺の道具柄が数多く有りますが、身の回りの物を良く見る事が作品作りの原点となっているでしょう。

先生の模様に対する姿勢の一例を挙げさせていただきます。

我が師匠であります、長沼孝一（国画会会員）も芹沢門下の一人ですが、長沼が得意とする捺染の中に、モザイク紋と言うものがあります。型捺染ですが、型紙は一枚で、彫り進めて行く技法です。それを芹沢は顔料染で新たに作り替えてしまいました。モザイク文地白色入り縮緬着物という作品です。

弟子の作る作品をより良く作り直して、弟子がへこむ事はしばしば有ったようです。

自分にも人にも良き道を求めた訳で、作成した型は直すところの無い完成された物になるのです。

## 孫弟子として見てきた 芹沢銈介の凄さ

土屋染色工房主宰 国画会工芸部会員 土屋 直人

つちや なおと

藤沢で染色工房を主宰。制作のかたわら教室をひらき、技法の伝承に務めている。朝日カルチャーセンターや横浜市松風学園などでも指導している。



## 陳列にも一切の妥協なし

国展陳列でのエピソードです。

私がまだ国展に出品前の一九七二年から七三年ごろの事です。

長沼工房からは私、芹沢染紙研究所、柳工房などから二十代の十数名が陳列の作業に駆り出されます。

東京都美術館（旧美術館です）で開催の国展工芸部の陳列も最終になり、そろそろ片付けに入るかどうかと言う時に、芹沢先生がフラッと会場に現れます。そして工芸部会場を一瞥します。ステッキを上げて陳列作品の移動を指示します。都美の床は組木にオイルがしみ込んだ大変すべる物でした。そして梯子での作業でした。梯子を掛け、作品を外し、脇に抱えて降り、並べ替えの作品と掛け替えるのです。一回では終わらずに何度も梯子の上り下りです。

芹沢先生はジッと見ていますが、気がつくと思いません。納得して帰られたのです。

「陳列は作品だと思へ」。この言葉は何度も師匠から聞かされましたが、芹沢の言葉なんだと思います。しかし、一日かけて陳列した会場を最後に来て直しを入れる、作品を良く見せたいという気持ちは分かりませんが、師匠の、一日何をやっていったのかな？と言う嘆きも理解出来ます。



## 若者への思いやり

芹沢先生の若い方々を想う、優しい一面も教わりました。

芹沢染紙研究所には常時一〇人ほどの若い方々が働いていました。主にカレンダー制作でしたが、その中から数名が、芹沢の作品制作に関わるようになっていました。

年代も同じで、民芸館の陳列替えの帰りに一緒に飲んだりしていました。

私の冬はスキー三昧で、研究所の六〇七名と小島工房の小島貞二さんと石打にいく事になりました。一年目は楽しいスキーでしたが、二年目のスキーから帰って、長沼が蒲田に呼び出されたのです。「君の所の子がどうも研究所員をまとめてスキーにいったそうだが、何かあったらどうするのだ？」と聞いたのだしたそう

です。どのように返答したかは師匠から聞いていませんが、「芹沢からおとがめを受けるような事はやめておきなさい。」となり、三年目のスキー旅行はなくなりしました。怪我を心配するあまり、楽しく過ごす時間は取り上げられたのでした。

芹沢先生が亡くなられて三十九年です。我が師匠も次の年六十三才で亡くなりました。

私、長沼工房から独立して四十三年。ひたすら広幅を染めてきました。芹沢先生のように幅広く多作では有りませんが、年に二〇〇から二五〇着分余り広幅布を染め、商品化し、百貨店、民芸店で販売してきました。

これも長沼工房に入り、型染に巡り合えた事が何よりの事だと思っています。

## 「型絵染」について

土屋氏が長年取り組んできた染色の技法が、芹沢銈介が人間国宝として認定された「型絵染」という手法です。たくさんの工程で、通常それぞれの職人が担当しますが、芹沢銈介はそのすべての工程を一人で手掛け、そのことが重要無形文化財認定につながったと言われています。



工房でデザイン画を描く土屋氏



①デザインを型紙に起こし取り切り抜く



②「紗(しゃ)」と呼ばれる布を貼る



③防染糊を置き染色しない部分を作る



④糊が乾いたら顔料で色を差し、水洗いして糊を落として完成

考古学の視点から見る二つの原画

## 原画に描かれた太古の港北

横浜市歴史博物館  
学芸員  
橋口 豊



はしぐち ゆたか  
考古学を専門とし、数多くの企画展をプロデュースしている。「美術の眼、考古の眼」(二〇二二年)君も今日から考古学者！横浜発掘物語(二〇一五〜二〇一九年など)

### はじめに

港北公会堂の緞帳絵は決定に至るまでに芹沢銈介による原画が複数枚作成されたことが伝えられています。

そのうち二枚が考古学と関係深いものであり、二〇二二年九月一〇日(土)実施の『横浜市港北公会堂の「どんちよう」を楽しむ』にてお話しするご縁を得ました。その時の内容をもとに二枚の原画について、現在、わかっていることを記します。

### 原画「遺跡」

この作品は、緑地に黄色い縁取りの鈍い逆S字をメインモチーフとしています。メインモチーフの中に十三個の白丸をあしらいその更に内側には四個の円形文を描いています。

このモチーフは、現在の住所でいう都

### 「遺跡」



①

②



「遺跡」のモチーフと思われる写真を掲載したリーフレット

筑区大棚西に所在する大塚遺跡です。黄色い縁取りは集落をめぐる溝、環濠で、逆S字モチーフの内部の円は半地下式の堅穴住居、小円は屋根を支えた柱穴を表現しています。

大塚遺跡は隣接する歳勝土遺跡と共に弥生時代中期後葉の集落と墓域を構成し、国史跡に指定後、一部保護されて遺跡公園として活用されています。

緞帳作成が一九七八年で、大塚遺跡の発掘調査が一九七二〜一九七六年まで(追加調査も入れると一九八三年まで)実施されており、大塚遺跡の重要性が発掘調査によって明らかになりつつあった時期に重なります。

日吉の森庭園美術館では関係資料として、一九七五年刊行の大塚遺跡の解説リーフレットを確認できました。写真右の大塚遺跡の空撮写真を参考にしたのでしよう。

「遺跡」内にはもう一点弥生時代に着想を得たモチーフがあります。左下の花器(①)はおそらく大塚遺跡出土の宮ノ台式土器の壺と考えられます。リーフレットでほぼ同じ形の壺(②)を確認できます。

## 原画「土器」

もう一点は大きく縄文土器が描かれたものです。はじめに拝見した時は、縄文時代中期の土器であることは分かったのですが、ところどころ不明瞭だったため横浜市内出土の土器なのか実在のモチーフなのか判断とせませんでした。

後日、日吉の森庭園美術館から送られた写真を拝見したところ、これがまさに原画のモチーフとなった縄文土器、南関東や横浜でも出土する加曾利EⅠ式土器でした。そこでひとつ問題が発生しました。果たしてどこから見つかったものなのか。

## 「土器」



写真には一九七八年撮影とあり、土器は破片を繋ぎ復元され柵に置かれています。さらに右端に見切れるようにもう一点の土器らしき影が確認できます。件の土器は専門性の高い施設に所蔵されているのではないかと考え、横浜市歴史博物館の収蔵庫を探し、(公財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センターに照会を掛け



緞帳原画「土器」のモチーフと思われる土器の写真  
しかしどこで発見された土器なのか不明

ました。しかし、残念ながら確認できず、現在に至っています。

## おわりに

芹沢銈介作の原画のうち二枚についての所見を記しました。地域の宝を掘り起こし、再認識する場に居合わせることでできたこと感謝申し上げます。

「土器」のモチーフ特定は継続して実施中です。情報をお持ちの方いらっしゃいましたら横浜市歴史博物館までご一報ください。

「陽に萌える丘」を手がけた繊維会社と新たな港北の宝

# 織物作品としての緞帳

京都・川島織物セルコンの仕事

「陽に萌える丘」を製作したのは、今年創業一八〇年になる京都の繊維会社、川島織物セルコン。普段なかなか見ることのできない緞帳製作風景とともにご紹介します。

## 緞帳は巨大な一枚織物の作品

つづれ織の緞帳は何本もの糸を撚って作った色糸を、強く張った縦糸に下絵に合わせて一本ずつ織り込んで作られる巨大な織物です。広い舞台に設置する大きなものでは、総重量一トンを超えるものもあります。製作には熟練した技が必要となり、多くの色を使った微妙なグラデーションにより繊細な絵画的な表現が可能な一方、織物独特の目の粗さを活かすことで力強い表現もでき、それ自体が一つの工芸作品と言えます。



作家が描いた原画をもとに緞帳と同じサイズの下描きを描く作業

るものです。

港北公会堂の緞帳は、幅十三・二メートル、縦六・五メートル。製作したのは、京都にある株式会社川島織物セルコン（一九七八年の設置当時は「川島織物」という会社。芹沢銈介が港北区からの依頼で緞帳の下絵を描くにあたり、緞帳として織り上げることをこの会社に委託することを条件にしていたと言われています。

## 日本の織物文化を創った会社

川島織物セルコンは一八四三（天保四年）年の創業以来、織物を通して美しいものの探求と創作の仕事を続けてきた会社です。これまでに能装束やつづれ織りの壁掛け、迎賓館の内装等様々な仕事をしてきています。社内には、伝統的な手織りと機械による量産のどち

港北公会堂のようなつづれ織りの緞帳については、一九五一年に大阪朝日会館の緞帳を日本で最初のつづれ織り緞帳として納入したのを始め、国立劇場・歌舞伎座や全国各地の劇場・会館・ホールなど幅広く手掛けています。

29 ページで紹介したように、芹沢銈介は港北公会堂の他に、大阪フェスティバルホールと静岡市民文化会館の二点の緞帳の原画を描きました。それらの原画を元に実際の緞帳を織り上げたのも、この川島織物セルコンです。

二〇二四年春、再開発が進行中の東急新横浜線・新綱島駅に「港北区民文化センター」が新たにオープンします。主要な施設となる最大四〇〇人収容のホール

## 新たな港北の宝がまたひとつ

らも可能な技術と設備があり、企画・デザイン、設計、製織から、燃糸や染色など、織物を完成させるまでのほぼすべての工程を自社内で行う機能を持っています。



膨大な数の色糸を絵柄に合わせて手作業で織り込んでゆく



港北公会堂の緞帳裏に縫い付けられたタグ



緞帳を織る作業場の後ろには社内で染められたさまざまな色糸が積みされている

の緞帳も川島織物セルコンが手掛けることになっていきます。この緞帳については、製織だけでなく、地元ゆかりのあるさまざまなイメージを盛り込んだ図案制作も併せて行っています(次ページ参照)。港北区に、地域の宝がまたひとつ誕生します。

# 港北区民文化センター 「ミズキーホール」の緞帳



「ゆめの花を咲かせて」と名付けられた新しい緞帳のデザイン



©横浜市港北区ミズキー



ホール内部の完成イメージ

二〇二四年三月、新綱島駅周辺の再開発ビルの中に、港北区の文化芸術活動の拠点となる港北区民文化センター「ミズキーホール」が開業します。同センターに設置される緞帳の製作は「陽に萌える丘」を手掛けた川島織物セルコンが、デザインも含めて担当しています。ちなみにセンターの愛称「ミズキーホール」は、区民から寄せられた愛称案一五二作品の中から、審査により選ばれた最終候補の四作品に対して区民投票を行った結果決定したものです。

## 寄稿

株式会社川島織物セルコン  
生産部 美術工芸生産グループ 緞帳デザイン担当

堀田 美幸

ハートでつながるわたしたちのまち、という基本コンセプトを基に、人々の心の中にある「ゆめの花」が大きく開花する時を、港北区のモチーフを取り入れながら

抽象的に表現しました。たおやかな金色の繊細なラインは、花卉のアールや風に吹かれて揺れる様子や、川の流れ、賑わい発展する未来へのひろがり、をイメージしています。

モチーフのハナミズキ・梅は、区の木・区の花のシンボルマークを引用、アレンジし、上方には区のマークにある向かい合う鳥がそれぞれ翼を広げて羽ばたいていく様子を思い、構成しました。他にも草花や水辺に住む魚たち、指定文化財である横浜市大倉山記念館や、

地域の歴史や生活を象徴する古民家など、親しみを感じていただけるように、港北区に因んだモチーフを重ねました。

色とりどりの四角形は、様々な花々の色や、人々の多様性、整備された街の様子や、夢と希望の象徴です。花と水の色を使った地色を円形にばかす事で、より空間を広く、奥行きを感じていただけるようにしました。

また全体的には、内装の木質に合わせて優しい色調としました。

和洋を問わないデザインは、様々な演目にも合わせやすく、多目的にお使いいただけると思います。

港北区の皆様が親しみを感じていただき、長く愛される緞帳となりますように。

# 「陽に萌える丘」をさらに知るために

## 原画を見に行く

下記の美術館に所蔵・展示されています。  
観覧には予約が必要です。

### 日吉の森庭園美術館

横浜市港北区下田町 3 丁目10-34

TEL : 045-561-3214

HP : <http://hiyoshinomori.com>



## 実際に緞帳を見学する

港北公会堂の講堂に常設されているため、  
事前に問い合わせ・予約・確認が必要となります。

### 横浜市港北公会堂

横浜市港北区大豆戸町 26-1

TEL : 045-540-2400

HP : <https://kohoku-kokaido.jp>



## 制作経緯や由来をもっと詳しく知る

### ■ 田邊泰孝著 『陰徳積めば陽報あり』

自費出版のため書店での購入はできません。  
港北図書館、日吉の森庭園美術館にて閲覧ください。

横浜市港北図書館：横浜市菊名 6 丁目 8-10  
TEL 045-421-1211

### ■ 『民藝』第807号 2020年3月号

特集「芹沢銈介の緞帳とステンドグラス」日本民藝協会発行

### ■ 映像作品「芹沢銈介 知られざる港北の宝 ～公会堂の緞帳をデザインした人間国宝～」

企画：芹沢銈介緞帳プロジェクト

制作：わがまち港北映像プロジェクト (2021年8月制作)

「港北映像ライブラリ」にて視聴できます▶

HP : <https://kohoku-yokohama.jp>



### ◆ 編集を終えて ◆ 芹沢銈介緞帳プロジェクトより

冊子制作により、緞帳「陽に萌える丘」を中心に土地の繋がりや、目に見えるかたちに表すことができました。ご執筆・寄稿いただいた皆様はじめ、東北福祉大学芹沢銈介美術工芸館、日本民藝館、静岡市立芹沢銈介美術館の皆様には大変お世話になりました。この場を借りて深く御礼申し上げます。

プロジェクト代表 大野玲子

全体構成と編集を担当しました。私は港北区に住んで長い(六〇年近く)のですが、公会堂の緞帳のことはこのプロジェクトで初めて知りました。この冊子制作を通じて、知らなかった港北区のことや、緞帳製作のこと、芹沢銈介のことなどということが見えてきて、苦勞もありましたが、楽しくワクワクする経験でもありました。

企画・構成 阿部知行

緞帳プロジェクトに参加した当初、定例会で皆さんのお話を聞くたび、沢山の人と活動が自分の住んでいるまちにあることに驚きました。今回冊子制作に関わり、私もそこに参加できたことは大変貴重な経験だったと思います。

デザイン 荒山智奈美

港北公会堂緞帳

## 陽に萌える丘から解き明かす港北の歴史

人間国宝・芹沢銈介が描いた知られざる港北の宝

2023年3月31日 初版発行

編集・発行—— 芹沢銈介緞帳プロジェクト  
[mail@serizawadoncho.info](mailto:mail@serizawadoncho.info)

協力—— 港北ふるさとテレビ局

- ◆この冊子は「港北区地域のチカラ応援事業」の補助金をいただき制作しています。
- ◆許可なく転載・複製することを禁じます。

### 芹沢銈介緞帳プロジェクト

「芹沢銈介緞帳プロジェクト」は、港北公会堂の緞帳の由来と美術的価値を多くの人に知ってもらう目的で2019年に発足した市民グループです。2021年12月には港北公会堂でイベントを実施(右の写真はそのポスター)。そこで集めた情報や人々とのつながりを発展させ、ここに冊子としてまとめることができました。



